

中山間農業集落居住者の環境意識と整備方向の検討

誌名	農業工学研究所技報
ISSN	09153314
著者	小嶋, 義次 岡本, 佳久 筒井, 義富 山本, 徳司
巻/号	199号
掲載ページ	p. 99-108
発行年月	2001年2月

中山間農業集落居住者の環境意識と整備方向の検討

— 長野県高森町を事例として —

小嶋義次*・岡本佳久**・筒井義富*・山本徳司***

A Study on the Environmental Consensus of the Residents of an Agricultural Community for Consolidating Policies for Hilly and Mountainous Area — A Case Study of Takamori Machi in Nagano Prefecture —

by Yoshitsugu KOJIMA, Yoshihisa OKAMOTO,
Yoshitomi TSUTSUI and Tokuji YAMAMOTO

目 次

I 緒言	99	2 高森町住民の環境意識	101
II 研究の方法	99	3 地区特性を踏まえたアメニティ評価結果	103
1 調査研究の枠組み	99	4 今後の整備方向と環境改善に関する意向	105
2 調査対象地の選定	100	5 まとめ	106
3 調査方法と研究の範囲	100	IV 結言	107
III 長野県高森町における住民の環境評価実態	100	参考文献	107
1 地域の概況	100	Summary	108

I 緒 言

近年、中山間地域は、農業生産の場であるとともに、ゆとりやうおいのある地域として、またグリーンツーリズム等をはじめとした癒し効果を持つ場として注目されている。しかし一方では、過疎化や高齢化等によって社会生活の維持が困難な地域として問題視されてもいる。こうした相反する状況や条件について、プラス・マイナスの両極から論じられているのが中山間地域の現状である。

そうした地域の環境整備を進めるに当たっては、全国一律に対応するのではなく、そこに居住し生活を営む住民が自らの環境をどのように認識し、評価しているのかを知った上での対応が不可欠の手続きであると考えられる。なぜ

なら、地域環境に対する住民の評価は、地域環境の様態によっても変わるからである。

以上の観点から、本報では、中山間に位置する農業集落の地域環境を構成する代表的要素が地域住民によってどのように認識されているかの実態を事例的に明らかにする。またそれが地域特性とどのように関わっているかについて考察することで、現在の中山間農業集落の環境特性を生かした整備方向の検討を行う。

II 研究の方法

1 調査研究の枠組み

中山間地域の環境整備を行うにあたっては、そこでの生活主体者の現状認識と意向が重要であることは前述したとおりである。しかし同一自治体内であっても環境の様態や環境変化の進行・過程は異なる上に、多様な属性（年齢、職業）を持った人々が居住している。そのため、環境に対する意識も年齢階層や職業などの属性ごとに異なることが予想される。

本研究では、中山間農業集落の整備方向を検討するにあ

* 農村整備部集落整備計画研究室

** 現内閣府

*** 現企画連絡室

平成12年11月21日受理

キーワード：農村計画，環境整備，地域特性，意識調査

たつて、

- (1) 地域の環境の変化を調査する
 - (2) 地域住民の属性別に環境意識、アメニティ評価及び整備意向の3つの調査を行う
 - (3) 調査結果を総合的に分析することにより、地域特性を考慮しかつ地域住民の求める整備方向を抽出する
- 以上の項目で研究を展開することとした (Fig. 1)。

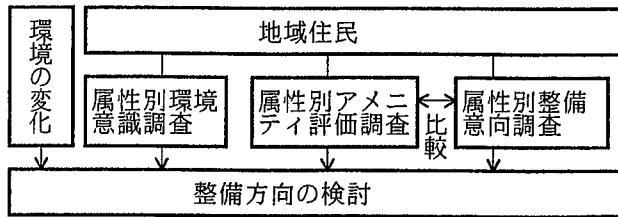


Fig. 1 地域環境整備のための調査・計画の枠組み

2 調査対象地の選定

長野県高森町を調査対象地に選定した。高森町は以下に示すような特徴を有しているため、属性別の意識評価の異同が明確になると判断した。

①実質的に中山間地域として認識されている：

経済地帯区分で見ると中山間地域と分類されるものの実態は大きく異なる場合も多い。高森町は、中央アルプスと南アルプスに囲まれた地域 (可住地傾斜1/9) で、山林や農地が多い土地利用 (田14%, 畑24%, 宅地10%, 山林53%) である。

②環境整備の実績がある：

花いっぱい推進事業、婦人ふるさとづくり事業、景観整備、カヌーによるまちづくり推進事業等環境整備を実施している地域であり、中山間地域の環境特性や整備方向を検討するに当たっての種々の問題点や意向が把握し易いと思われる。

③環境整備に対する住民意識が高い：

高森町は、住民参加型のまちづくりを行っており、平成10年3月に「潤いと活力のあるまちづくり」の住民参加型まちづくり部門で自治大臣賞を受賞していることもあり、住民が問題意識を持ち、様々な意見を有していると考えられる。

④同一自治体内に環境の違いが認められる：

高森町は、中央自動車道の整備、飯田市のベッドタウン化など、様々な経済的影響を受けている。もともと歴史的に同質地域ではあるが近年環境の変遷を経て多様な環境が創出された地域の方が、環境の違いによる住民意識の相違が現れやすいと考えられる。

3 調査方法と研究の範囲

地域環境を構成し、かつそれらが環境評価に大きな影響を与えるであろうと想定される代表的環境要素として、緑、

水、圃場、地形、施設等を取り上げた。またそうした対象を地域住民がどのように認識し、評価しているかをアンケート調査を主体として把握した。なお、被験者にインスタントカメラを持たせ、環境・景観上好ましいと思われるポイントを撮影させ、その対象の出現割合を分析する写真撮影法による評価も補足的に実施した。方法の詳細については、以下の事例研究報告に記述する。

III 長野県高森町における住民の環境評価実態

1 地域の概況

高森町は、長野県南部、天竜川沿いに位置している。集落及び耕地は、天竜川沿岸沖積地帯 (下段) から河岸段丘を重ね、洪積台地 (中段) を経て、山麓の扇状地帯 (上段) に至る標高400~750mにわたり立地している。町内は、7地区で構成され、それぞれの地区の位置する標高によって営農作目も異なり、りんご園・なし園・桃園・水田といった特徴ある景観を呈している (Fig. 2)。

昭和50年中央自動車道の開通、さらに平成元年に上段道路開通を初めとして、道路周辺の環境はかなり変化してきている。Fig. 2のA-Aで断面をとったものがFig. 3である。下市田の国道153号線沿いに都市的施設は集積し、山手の牛牧地区では農村的色彩が色濃く残っている。各地区の人口・世帯数をTable 1に示す。なお、高森町の人口は最近20年ほど、微増の傾向にある。

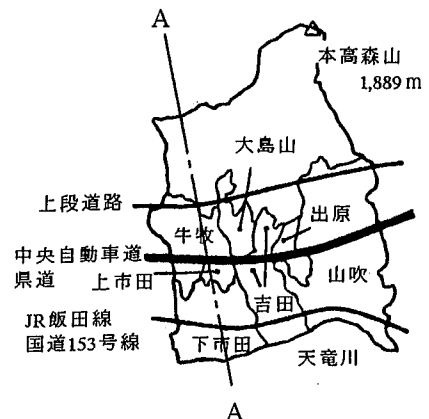


Fig. 2 地区位置図

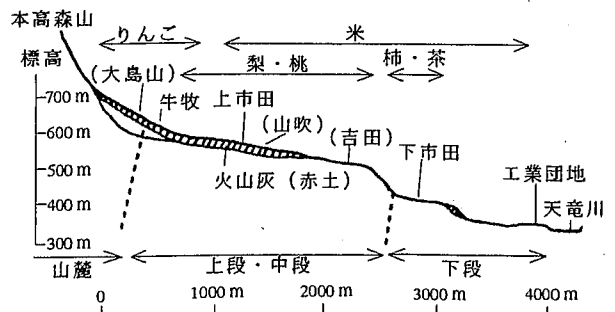


Fig. 3 高森町の断面と土地利用の模式図

Table 1 人口・世帯数（平成7年国勢調査）

	人口 (人)	世帯数 (戸)	世帯員数 (人/戸)
高森町	12,252	3,420	3.58
下市田	4,309	1,312	3.28
吉田	2,496	758	3.29
山吹	2,777	685	4.05
上市田	744	210	3.54
出原	310	83	3.73
大島山	439	102	4.30
牛牧	1,177	270	4.36

2 高森町住民の環境意識

調査対象地は高森町南小学校区である。年齢層による環境意識の相違を調べるため、被験者に児童層として小学校5年生児童全員（102人）、中高年層として児童の父兄（都合のつく26人）を選定した。環境意識調査については、アンケート方式により実施した。施設構造物に対する選好調査については、事前に対象地域で撮影した写真をスライドで見せながら実施した。

環境意識調査の設問はTable 2のような問いで構成した。

Table 2 環境意識調査の設問

項目	質問の内容
地域農業関心度 (児童層/中高年層)	農業に関心がありますか
地域好感度 (児童層/中高年層)	高森町が好きですか
居住持続意向 (児童層/中高年層)	これからも高森町に住み続けたいですか
景観改善への参加 (児童層/中高年層)	皆さんは地域の景観を良くしていくことに参加しますか(児童層) 皆さんは地域の景観改善の計画立案に参加しようと思いませんか(中高年層)
高森町らしさはどこか (児童層)	高森町らしさを感じる所はどこですか
地域の発展に必要なもの (中高年層)	これから、地域の発展を考えると き特に必要となるものは

a 農家・非農家別の地域環境意識の違い

①児童層：

農家の子供(10人)の方が非農家の子供(92人)に比較して、地域農業関心度、地域好感度、居住持続意向が強く、景観改善への参加意欲が2倍高かった(Table 3)。

②中高年層：

非農家（農作業経験者が多い）でも農業への関心度は高

い。また、地域好感度は農家の方が強い。景観改善への参加意識は、児童層の回答と異なり、非農家も比較的強い意識を持っているのが特徴であり、同様に、居住持続意向も農家・非農家ともに高い。高森町の住民は環境についての意識が高いため、「地域の発展に必要なもの」への回答で、住民意識の高揚に肯定的な結果になったと考えられる。ただ、農家においては、行政指導の展開にも期待している面も見られた(Table 4)。

なお児童層・中高年層とも地域環境に対する意識については、農家と非農家の違いによって若干異なる判断基準を有していることが認められる。

b 地区別の地域景観・環境意識の違い（児童層）

地区による違いをみるため、5年生の児童の中から国道周辺の下市田地区(35人)と、高森山麓に近い牛牧地区(20人)の回答を抜きだし、地域環境意識を比較した(Table 3)。その結果は次のとおりである。

- ① 地域農業への関心度は、「非常にある」から「全くない」まで分散したが、全体の傾向として下市田地区より牛牧地区の方が高かった。
- ② 地域好感度や居住持続意向は、牛牧地区の児童の方が高く、下市田地区では10%程度の児童が「嫌い」「移りたい」と答えた。
- ③ 景観改善への参加意欲は、牛牧地区が少し高い。
- ④ 高森町らしさはどこかとの問には、両地区とも回答が類似しており、「山林等、自然の緑」と「水田、果樹園等の緑」を約40%ずつの児童が選択した。

高森山麓に近い牛牧地区の方が、地域への好感度や居住持続意向が高く、また景観改善への意欲も国道沿いの下市田地区を上まわっていることが認められる。

c 施設構造物に関する意識の違い

施設構造物は、景観を変えるのはもとより周辺の環境に影響を与え、人々にイメージとして記憶されやすいことから、特に住民にとって身近な施設である①道路及び沿道施設、②居住関連施設、③水路及び水辺周辺施設等を題材に、施設に対するアンケート意識調査を行った。

(1) 施設構造物に対する選好性の結果 (Table 5)

- ①道路及び沿道施設については、全体的に児童層も中高年層も同様の評価傾向を示した。具体的には、歩道のあるアスファルトの直線道で沿道の柵は本物の木でできているものといった組み合わせをプラスにイメージしているといえる。法面については、中高年層は芝生を、児童層はレリーフと芝生を選好している。
- ②居住施設等については、児童層はカナディアン・ハウスといった現代風の施設に対し、中高年層は和風建築に対し選好性がみられる。それ以外では、中高年層、児童層ともに住居は散在し、広場は芝生が生え、公園の遊具は木でできたもので、花壇の花よりは自然の花

が望まれている。

③水路及び水辺周辺施設等については、児童層がフェンスのある施設を選好したが、中高年層はフェンスのない施設を選好した。また、中高年層、児童層ともに、自然のままの河川護岸や水路を望み、新しい橋梁を望んでいる。

(2) 施設に対する選好と地域景観に関する調和度の評価結果 (Table 6)

中高年層は、施設が周囲の景観と調和しているほど好ましいという評価を与えた。これに対し児童層は、施設が周囲の景観と調和していることと、その施設が好ましいかどうかとの判断は一致せず、近代的施設を好ましいとする傾向にある。

中高年層と児童層とで「好ましくない」という評価が一致したものは、山麓にある黄色の「橋梁」及び日本では見かけることの少ない「カナディアンハウス」であった。

Table 3 児童層の意識調査結果

(単位：%)

選 択 肢	家 業 別		地 区 別	
	農 家	非農家	下市田	牛 牧
●地域農業関心度				
1. 非常にある	60	7	9	20
2. ある	40	30	34	30
3. どちらともいえない	0	35	20	35
4. ない	0	16	14	15
5. 全くない	0	12	23	0
●地域好感度				
1. たいへん好き	40	28	17	45
2. 好き	20	23	26	25
3. 普通	30	38	46	30
4. 嫌い	10	3	6	0
5. たいへん嫌い	0	4	3	0
●居住持続意向				
1. これからも住み続けたい	60	46	46	60
2. できれば移りたい	20	11	11	5
3. すぐにでも移りたい	0	3	3	0
4. わからない	20	34	34	30
●景観改善への参加				
1. 是非参加したい	30	8	9	10
2. 参加してもよい	50	31	23	35
3. 参加したくない	0	28	34	25
4. わからない	20	33	34	30
●高森町らしさはどこか				
1. 山林等、自然の緑	40	41	40	45
2. 水田、果樹園等の緑	50	28	42	40
3. 河川、水路等の水辺	0	2	3	0
4. 公園、神社など	10	14	9	0
5. 町並み等、居住環境	0	10	6	5

※家業 (農家10人, 非農家92人), 地区 (下市田35人, 牛牧20人)
 ※100%にならない分は無回答

Table 4 中高年層の意識調査結果

(単位：%)

選 択 肢	農 家	非農家
●地域農業関心度		
1. 非常にある	78	29
2. ある	22	41
3. どちらともいえない	0	24
4. ない	0	6
5. 全くない	0	0
●地域好感度		
1. たいへん好き	44	6
2. 好き	44	29
3. 普通	12	47
4. 嫌い	0	6
5. たいへん嫌い	0	0
●居住持続意向		
1. これからも住み続けたい	89	82
2. できれば移りたい	11	0
3. すぐにでも移りたい	0	0
4. わからない	0	12
●景観改善への参加		
1. 是非参加したい	22	18
2. 参加してもよい	67	41
3. 関心のある人が参加すればよい	11	29
4. わからない	0	6
●地域の発展に必要なもの		
1. 地域住民の意識の高揚	45	76
2. 活動のためのソフト (組織など)	11	6
3. 活動の契機となるハード (施設)	0	6
4. 人材の登用と育成 (民間, 町内外)	11	12
5. 行政主導の展開	33	0

※農家 9人, 非農家17人
 ※100%にならない分は無回答

Table 5 施設構造物に対する選好調査結果 (単位:%)

道路及び沿道施設の選好			居住施設等の選好			水路及び水辺施設等の選好		
選 択 肢	中 高 年	児 童	選 択 肢	中 高 年	児 童	選 択 肢	中 高 年	児 童
●道路形状			●居住形態			●川岸護岸		
1. まっすぐの道	65	72	1. 密居集落	38	25	1. 石で整備	19	9
2. カーブした道	23	28	2. 散在集落	58	75	2. 自然のまま	77	91
●通 学 路			●住 宅			●水 路		
1. アスファルトの道	65	53	1. カナディアンハウス	15	41	1. 石で整備	19	47
2. 土のままの道	35	47	2. 本棟造り	27	35	2. 自然のまま	81	53
●道路付帯施設			3. 和風住宅			●ため池		
1. 歩道あり	92	77	4. 最近の住宅	15	10	1. フェンスで囲われた	38	81
2. 歩道なし	8	23	●広 場			2. フェンスなし	58	19
●沿道の柵			1. 芝 生	88	85	●水路安全柵		
1. 本物の木	53	58	2. 砂利敷き	12	15	1. フェンスで囲われた	42	77
2. 擬 木	12	42	●公園の遊具			2. フェンスなし	58	23
●法 面			1. 木でできた遊具	81	83	●橋 梁		
1. コンクリートブロック	8	4	2. 金属の遊具	19	17	1. 新しい橋	69	56
2. 芝 生	46	42	●花壇と自然の花			2. 古い橋	27	44
3. 石 積 み	27	3	1. 花 壇	38	17	合計が100にならない分は 無回答		
4. レリーフ	15	51	2. 自 然	62	83			

Table 7 写真撮影対象割合

撮 影 対 象	中 高 年 %	児 童 %
花	7.9	6.2
木	2.0	17.1
水田・畑地	7.0	11.6
果 樹	3.5	7.8
山 林	2.0	6.2
町並・家並	18.4	8.5
施 設	15.8	8.5
寺社・仏閣	23.7	5.4
公 園	5.3	9.3
作 業 風 景	5.3	0.8
川や池の生物	2.6	10.9
その他風景	7.0	7.8

Table 6 施設に対する選好及び地域景観への調和度評価 (単位:%)

施設	評 価	選 好		地域景観調和度		
		中 高 年	児 童	調和している	中 高 年	児 童
橋 梁	好ましい	23	58	調和している	15	16
	好ましくない	73	42	調和していない	81	84
御大の館 (交流施設)	好ましい	23	76	調和している	15	55
	好ましくない	77	24	調和していない	85	45
センテナリアン (養老ホーム)	好ましい	31	47	調和している	31	53
	好ましくない	69	53	調和していない	61	47
カナディアンハウス	好ましい	27	73	調和している	27	39
	好ましくない	73	27	調和していない	73	61

(3) 写真撮影対象割合

前出(1)及び(2)の選択調査(被験者が与えられた選択肢から選ぶ調査)とは別に、自らの意志で回答を引き出す写真撮影調査を実施した。具体的には、被験者が地区内で自由に歩き回り、環境や景観上好ましいと思うポイントを撮影させるという方法である。

対象者は牛牧地区の中高年層(20人)と児童層(19人)である。なお撮影枚数は、中高年層が137枚、児童層が138枚であった。

これらのうち、各撮影対象の出現割合をTable 7に示す。

中高年層は「寺社・仏閣」「町並・家並」「施設」の順に撮影(出現)割合が多く、これらはいずれも施設構造物である。それに対して児童層は、「木」「水田・畑地」「川や池の生物」の順に撮影(出現)割合が多く、自然や生物

を撮影対象としていたことがわかる。

このことは、中高年層は対象を歴史的背景、連続的景観、利用面から評価し、対象とその背景にあるものを関連づけた評価をしたと考えられる。一方、児童層は、直接触れて自由な体験ができる自然環境、つまり身近で接する機会の多い対象それ自体を評価したと考えられる。

3 地区特性を踏まえたアメニティ評価結果

まちづくりシンポジウムに参加した約90人にTable 8に示す項目でアンケート用紙を配付し、終了時に回収した。回答は55人から得られた。性別内訳は、男性37人、女性16人、性別未記入2人、年齢別内訳は、30代4人、40代13人、50代6人、60代23人、70代3人、未記入6人であった。

分析は、町内を立地条件から①中心的地区(下市田地区

及び上市田地区), ②中間的地区(吉田地区, 出原地区及び山吹地区), ③辺地的地区(牛牧地区及び大島山地区)の3つの地区タイプに分類し, それぞれのタイプ毎に行った。各地区タイプの人数は, 中心的地区:12人, 中間的地区:34人, 辺地的地区:9人であった。

Table 8 アメニティ評価の設問

項目	質問の内容
町内の環境で変化を感じる項目	町全体の環境が変化したと感ずるのは, 何の変化が一番だと思いますか
環境や景観の良さを感ずさせる項目	環境や景観の良さをどこに感ずますか(2個選んで下さい)
不快さを感ずさせる項目	身の回り環境の不快さを感ずるのは, どの要素ですか(2個選んで下さい)

集計結果を Fig. 4, 5, 6 に示す。中間的地区で選択率が高いものから順に並べて他の地区タイプと比較した。分析結果は次のとおりである。

a 町内の環境で変化を感じる項目 (Fig. 4)

中間的地区で最も高かった「道路の改修・新設」は, 中心的地区で最も高く, 約60%の人が選択した。逆に辺地的地区では, ほとんど選択されなかった。道路密度や改修・新設頻度の差によるものと考えられる。

また, 大型施設の建設は, 中間的地区では20%以上であったのに対し他の地区タイプでは低かった。これは近年, 郊外に大規模なスーパーマーケットが建設されたことに起因するとみられる。

「圃場の転用」は, 辺地的地区で特に選択した割合が高かったが, これは農地の喪失に対する危機意識の現れとみられる。

その他の項目については, 全体的に選択率が低く, 地区タイプ別に大きな差は認められなかった。

b 環境や景観の良さを感ずさせる項目 (Fig. 5)

「田や畑や果樹園」は, 各地区タイプとも40%以上の回答があり, 特に辺地的地区では過半数に達した。

また, 高森町の地域性を示す「標高差による風景の違い」も全地区共通して高い選択率となっている。

その他, 「特産物や農業生産の活性化」は, 中心的地区で高い割合を占めた。

「特産物や農業生産の活性化」に関しては, 中心的地区で高く辺地的地区で低かった。この理由として, 高森町名産の農産物加工施設が中心的地区に存在していることが考えられる。

その他, 中間的地区では「公園や広場」「町並みや家並み」といった, 宅地周りの空間に関する回答が多く, 辺地

的地区では「山林や山並み」と「動植物の生息」といった自然に関する回答が認められた。

c 不快さを感ずさせる項目 (Fig. 6)

各地区タイプ共に約60~80%が「道や川へのゴミ投棄」

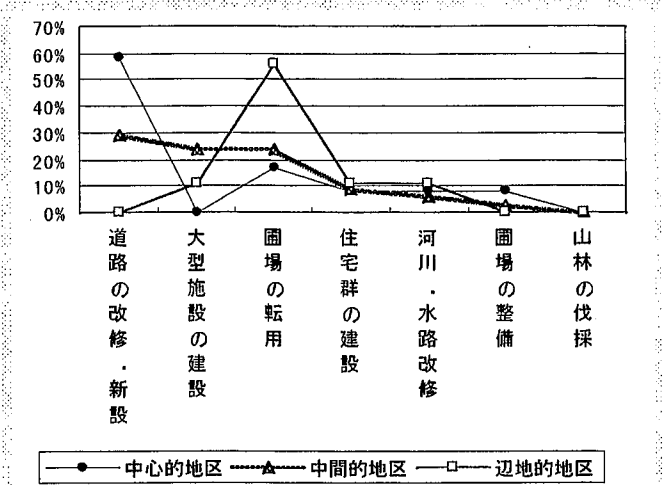


Fig. 4 町内の環境で変化を感じるもの

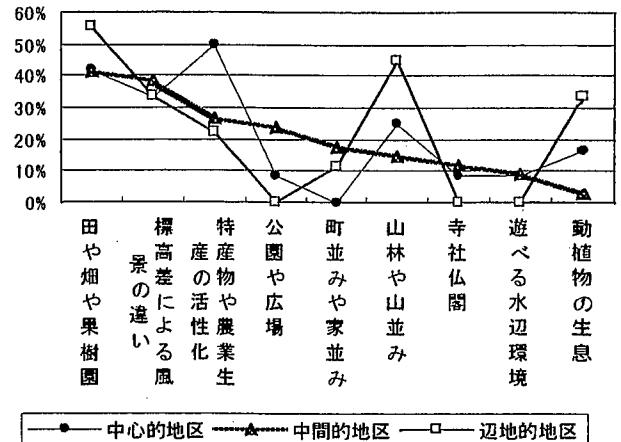


Fig. 5 環境や景観の良さを感ずさせるもの

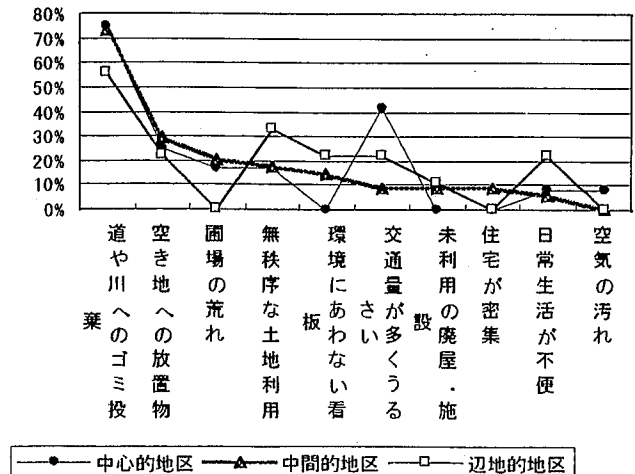


Fig. 6 不快さを感ずさせるもの

を挙げ、次に「空き地への放置物」となり、美観に関わる項目が挙げられている。

「圃場の荒れ」と「無秩序な土地利用」については、中心的地区と中間的地区での回答割合はほぼ同じ約20%であったが、辺地的地区では「圃場の荒れ」より「無秩序な土地利用」を挙げている。

「交通量が多すぎる」と「空気の汚れ」の回答が比較的であった中心的地区では、国道沿いに立地する地区であることが要因であると考えられる。その他、辺地的地区では、「無秩序な土地利用」「環境にあわない看板」「日常生活が不便」を回答した割合が比較的高かった。

4 今後の整備方向と環境改善に関する意向

前項3と同時に調査した。アンケートの設問は、Table 9のとおりである。

また、分析は、前項3と同様の地区タイプ区分に基づいてタイプ毎の特徴を相互に比較する方法で行った。

Table 9 整備方向に対する意向分析の設問

項目	質問の内容
今後の整備の方向	どのような環境の町に整備すべきだと思いますか
環境改善に効果的なもの	地域の環境を改善するに当たって効果的と思われる項目を選んで下さい(いくつでも)

a 今後の整備の方向 (Fig. 7)

中心的地区では42%が「このまま」を選択し、33%が「より田園的に」、17%が「田園の整備と都市的整備のすみ分け」を選択した。

中間・辺地的地区は、共に半数が「田園の整備と都市的整備のすみ分け」を望んでいる。しかし、両地区共それに続く「田園的な整備」の22~24%を加えると約7割が田園的な環境を残していく整備を望んでいることになる。また、中間的地区では「より都市的に」を選択したものが12%の値を示しているが、辺地的地区でその回答は皆無であった。

中心的地域では、都市的機能に満足する意見と、交通の渋滞等都市問題の改善に対する要望が背景にあるものと考えられる。また、中間的地区では現在の環境に満足する人が多い中でも、都市的機能を望む意見と、都市問題の改善に対する要望があると考えられる。

そして、辺地的地区では、都市的な機能を望む住民が既に他地区へ移住し、結果として田園的な環境に満足している住民が多くなったと考えられる。

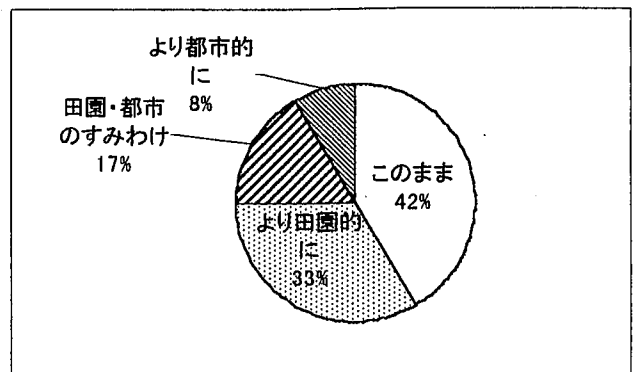
b 環境改善に効果的なもの (Fig. 8)

生活空間の美化、自然の保全、連絡道路の整備及び教育文化にかかる整備は、各地区タイプとも効果的だという回答が多かった。

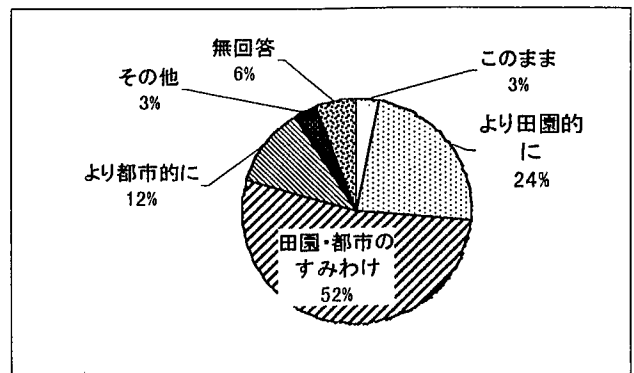
他の地区タイプに比較して多かった回答は、中心的地区では産業の誘致、中間的地区では土地利用の整序化であった。

以上のことから、各地区タイプともに自然や環境を保全しながら生活の向上を図ることが有効であると考えているが、さらに中心的地区では産業の発展も必要だと考えていることが分かる。ただ、中間的地区では、開発等の行為を目にする機会が多いため、土地利用の整序化を望んだものと考えられる。

(a) 中心的地区



(b) 中間的地区



(c) 辺地的地区

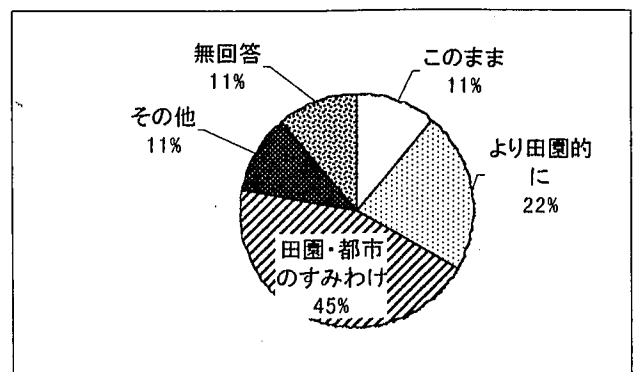


Fig. 7 今後の整備の方向

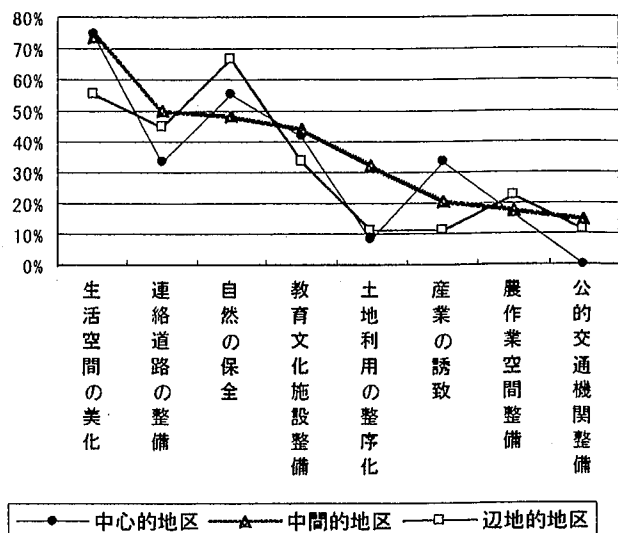


Fig. 8 環境改善に効果的なもの

5 まとめ

(1) 地域環境に対する住民の評価は、年齢階層、職業あるいは居住地区等の属性によってかなり異なることが明らかになった。

例外として、「高森町らしさはどこか」との問いには、異なった地区であっても「山林等、自然の緑」や「水田、果樹園等の緑」の回答割合が共通して高かった。

地区別に異なった結果となる問いは、「農業への関心度」「居住持続意向」「景観改善への参加」で、山麓部に位置する地区の方が意欲的な傾向が見られた。

児童層においては、農家と非農家では、農家の子供の方が地域農業に関心が高く、地域に好感を持っていることが認められた。

中高年層は、児童層よりも景観改善への参加意識が高く、中高年層の中でも農家の方が地域に好感度を持っている。

また、農家の方が行政主導の展開に期待する傾向があった。

環境や景観上好ましいと思うものについては、中高年層は施設構造物を、児童層は、自然や生物を選好した。

(2) 地区タイプ別に環境への関心度を分類した結果では、次のような違いがあった (Fig. 9)。

①中心的地区：

まず関心が高いものは、自らの生活空間に関わる項目の「騒音や空気のごれがないこと」である。ついで「公園や施設の整備」や「自然・農地の保全」に関する回答が多い。

②中間的地区：

「公園や施設の整備」に特に大きな関心がある。また、「土地利用の整序化」や「自然・農地の保全」にも関心がある。

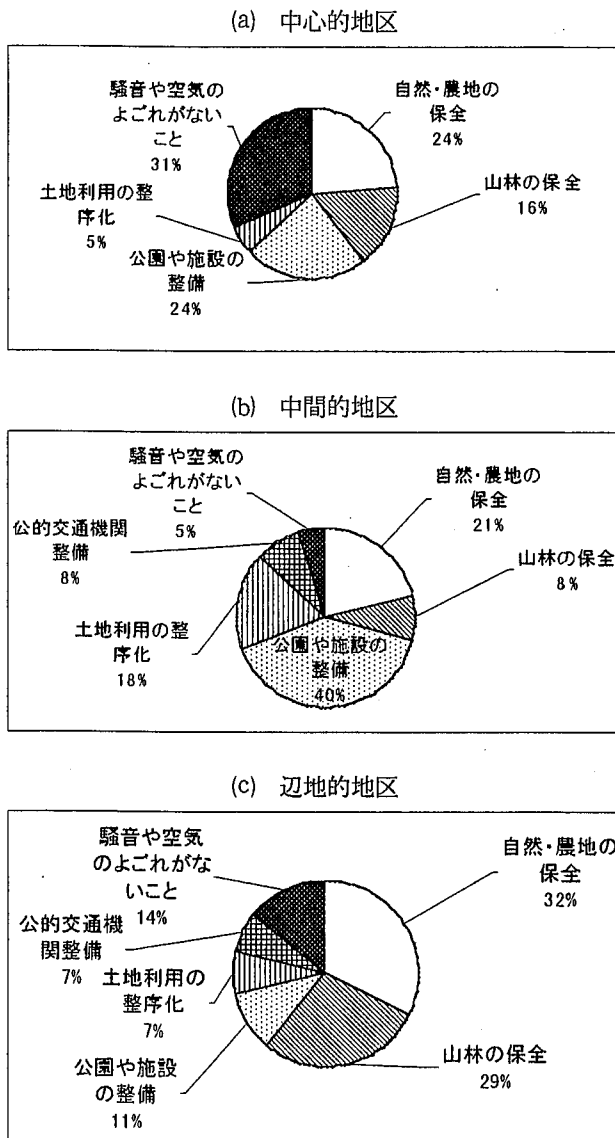


Fig. 9 どのような環境改善に関心があるか

③辺地的地区：

山林・農地の保全に関心があり、地域全体の景観や自然に関心を持っている。その他、「騒音や空気のごれがないこと」や「公園・施設の整備」「土地利用の整序化」に関心がある。

以上の結果から、中心的地区では、騒音や空気の汚れといった狭域的あるいは点的住環境、いわゆる私的な環境への関心度が高く、逆に辺地的地区では山林、農地、自然といった空間的広がりを持つ、いわゆる公的な環境に関心度が高いことがうかがわれる。また、中間的地区では、公園、施設といった上記両者の性格を共に有する共的な環境への関心度が高いことがうかがわれる (Fig.10)。

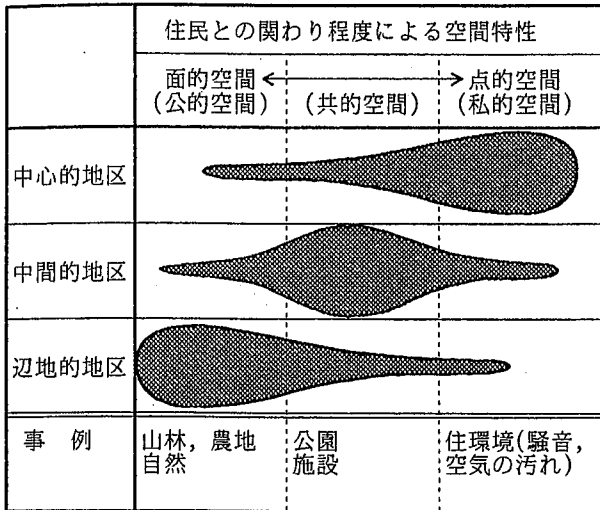


Fig.10 地区タイプ別環境関心のイメージ

IV 結 言

地域環境整備の目的は、地域住民を主人公とした定住環境の創出であることから、住民の意向が反映されたものでなければならない。地域にとって有用な環境整備は、①誰を対象に整備をするのか、②どんな整備方向を目指すのか、など住民の立場に立ったきめ細かな検討を第一に考慮する必要がある。

特に農村地域をとりまく社会・経済的条件が様変わりする中で、空間的諸条件も大きく変わり、非農家が多くなるなど、地域住民の属性も多様になっている。従って、地域

内部においては、

- (1) 住民の属性別環境意識をとらえることで、きめの細かな整備方向を模索し、また、
- (2) 地区の空間特性と住民の環境認識の実態を周辺地区との関わりの中で把握することが不可欠の要素になる。

長野県高森町を事例とした本研究によって、地域住民の属性を考慮した分析は、地域整備方向を検討するにあたっての一般解として、調査・計画づくりにおいて有効であると同時に不可欠であることを立証した。

近年では、多面的機能の増進を図る上で都市農村交流の場等の整備も求められていることから、本研究では実施していないものの、整備対象地区内の意識調査に加え、地区外住民の意識を参考としつつ、両者の意識の異同を明確にした上での調整を図る必要がある。

こうした地域の主人公である住民の意識あるいは関係者の意識を十分に踏まえた対応を行うことは、その後の地域の運営・管理を円滑に行うための不可欠な条件といえよう。

参考文献

- 1) 富田正彦 (1984)：現代農村計画論, (財)東京大学出版会
- 2) 窪谷順次 (1988)：現代地域計画論, (財)農林統計協会
- 3) 石川英夫 (1991)：環境問題と農村空間, (財)農林統計協会
- 4) 筒井義富 (1994)：これからの農村環境・景観形成に向けて
- 5) 山本徳司 (1995)：住民参加型の生活環境整備に向けて, 農地・農村の整備, 高須俊行編, (社)土地改良技術情報センター

A Study on the Environmental Consensus of the Residents of an Agricultural Community for Consolidating Policies for Hilly and Mountainous Area — A Case Study of Takamori Machi in Nagano Prefecture —

by Yoshitsugu KOJIMA, Yoshihisa OKAMOTO,
Yoshitomi TSUTSUI and Tokuji YAMAMOTO

Summary

In this study, the authors examined the focus to be established when conducting preliminary investigations and research for implementing environmental development in agricultural communities in hilly and mountainous Area, based on the results of questionnaires given to the residents of Takamori Machi in Nagano Prefecture.

To consolidate policies for environmental development, it is essential to understand the residents' consensus in regard to their awareness of the regional environment, assessment of amenity, and opinions about environmental development. To identify these aspects, questionnaires need to be implemented by classifying the residents into several groups by their attributes (e.g., age, subdivided districts, and occupation) so that the difference in opinions among such groups can be clarified.

The results of our investigation on the environmental awareness and opinions of the residents of Takamori Machi, a hilly and mountainous Area, revealed the following:

- (1) Elementary school pupils have different views depending on their parents' occupations and their regional attributes; those who are members of farming households or households in mountainous areas are more interested in their region.
- (2) The middle-and old-aged residents are more conscious about their participation in landscape melioration than the pupils, and those who are members of farming households are more favorably disposed to their region and expect for the environmental development with the initiative taken by the government.
- (3) In regard to environmentally and scenically favorable objects, the pupils care more for nature and living creatures, while the middle-and old-aged residents are more concerned with buildings and structures.
- (4) The results of a questionnaire conducted by dividing Takamori Machi into the central, subcentral, and peripheral districts were as follows:
 - ① In the central district, the residents are highly interested in the objects directly related to their living environments (narrowly limited space). They are content with the current state of agricultural production (regional prosperity).
 - ② In the sub-central district, the residents are highly interested in the objects that are closely related to their daily life. They are satisfied that forests and farm land are being well conserved, and are interested in already-developed facilities and the state of land use.
 - ③ In the peripheral district, the residents are highly interested in the landscape and environment of the entire region (broad space). They are satisfied with the state in which nature and farm land are being conserved.